

囲いやま森の会 活動記録

2007.12.10 野口 功

日 時： 2007.12.01 (土) 10～12時 天気： 晴

記録・写真： 山田幸子

観察記録

日に日に秋から冬へと様変わりしていく囲いやまです。これからは、色無き風を感じる日が多くなるのでしょうか。「寂しさに 宿を立ち出でて ながむれば いずこも同じ秋の夕暮れ」を感じる季節もあり、「白露に 風のふきしく秋の野は つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける」を感じる季節もあります。
皆様はいかがでしょうか？

今回は囲いやまの樹木を何本か写してみました。樹皮に様々な模様が見られました。

それぞれの樹齢・生育環境などを想像しながら、囲い山の樹木を眺めてみると、楽しいと思います。

1) アオキの虫こぶ・シロダモの虫こぶが観察できました。アオキにはアオキミタマバエという虫が、シロダモにはシロダモタマバエが入り込んでいます。

2) マンリョウは可愛らしい実をつけています。ちなみにセンリョウは、赤い実が上向きにつきます。
カラタチバナを百両・ヤブコウジを十両・ツルアリドオシを一両と呼ぶこともあるそうです。

図鑑などで見ると納得できます。一両はツルアリドウシの他にもいろいろあるようです。

山口さんによると、「ヒメコウジ(ツツジ科)流通名としてチェッカーベリーあるいはゴーテリアという園芸種。アリドオシまたはツルアリドオシ(アカネ科)とする人。

あるいは高地にみられるツツジ科の矮小性の赤い実をつけるものを挙げる人もいるようです。
まあ縁起物ですからいろいろなものがあってもいいですね。

一両のほうが見かけることがすくなく、かえって希少価値があって、こちらを万両としたほうがいいのではとも思います。」とのお話でした。

これからお正月に向けて観察するのも良いものですね。

3) ヤツデを観察すると、興味深いものがあります。ヤツデの花には雄花と雌花の区別はありません。ひとつの花が日が経つにつれて雄花から雌花に変わります。雄花の時期はおしべが花粉を出し、蜜も出します。やがておしべと花びらが散ると、今まで小さかっためしべが伸びてきます。すると、めしべが成熟すると再び蜜を出して、虫を呼びます。おしべとめしべの成熟する時期がずれているのは、同じ花の花粉がめしべに着くことを避けるための工夫です。近親交配すると性質の劣る子孫ができる可能性が高いからです。写真はどの時期でしょうか。囲いやまのヤツデをルーペで観察してみるのも楽しいですよ。

4) 樹齢による樹皮の変異は、どの木も同じような傾向があるようです。一般に若い木ほど平滑ですべすべしており、老いた木ほど深く裂けたりはがれる傾向があるようです。

若々しい木も良いですが、老木にはいぶし銀の魅力を感じます。

開花植物

木本 キヅタ・ヤツデ

草本 ハキダメギク・ウシハコベ・イヌタデ・セイタカアワダチソウ

実についている植物 マユミ・ネズミモチ・アオキ・マサキ・マンリョウ・ゴンズイ

鳥 ヒヨドリ・シジュウカラ・コジュケイ・コゲラ・ヤマガラ・イカル？

クモ ジョロウグモ

小屋の中にマダラカマドウマのフンらしきものが、たくさん落ちていました。カマドウマの仲間は床下や洞穴など、暗く湿ったところにいます。マダラカマドウマは、野菜クズやカビなどを食べるようです。

囲いやまの森

2007.12.01 (土) 山田幸子

小春日和： 晩秋から初冬にかけての暖かく穏やかな晴れの日。小春とは旧暦10月のこと、現在の11月頃に相当し、この頃の陽気が春に似ているため。俳句の季語は「冬」

今回の写真は、樹皮をテーマにしました。

